

令和6年度（2024年度）

長野県産業教育振興会 特別生徒研究助成 報告書

長野県上田千曲高等学校
生活福祉科 教諭 浅沼 智美

- 1 高等学校名 長野県上田千曲高等学校
- 2 学科・氏名 生活福祉科 高井 仁美（たかい ひとみ）
- 3 研究テーマ 高校生の力で地域の魅力を発信
～地域と協力して家庭支援のサポートを考える～

4 研究目的・概要

生活福祉科の課題研究の一分野に、将来長野県の幼児教育や母子支援、保育に関する社会福祉支援に携わり、未来を担う子供と保護者を支援する人材になりたいと学習を進めている「児童分野」がある。先輩たちの活動を引き継ぎ、子どもたちとの交流や体験学習から、さらに学びを深めたいという高校生たちの思いを、後輩の育成に尽力していきたいと話してくださる地域の皆様が、何とか実現しようとしてくださり、校内での活動だけでなく、たくさんの活動に取り組んでいる。その中のひとつに、上田市と小諸市の子育てマップの作製があるが、昨年度から小諸商業高校と一緒に取り組みを進めている。生徒自身が考えを出しあい、利用者が必要とする情報を発信するためにはどのようにすればよいか話し合いを進めていきたいと考えている。

また、地域の保育園と交流体験を通し、子どもの発達について学び、かかわり方や発達に合わせた遊びや学習について学習し、地域の中で子供を見守り、保護者へのサポートも充実することができるような体験学習から、子供を地域で育てていく環境の整備や連携について研究する。

5 研究過程

昨年からの取り組みに加え、今年度は生徒自身が地域の子育て支援に関する課題や疑問を知り、課題解決に向けた糸口はどこになるのかを学ぼうとする研究を積極的に行ってきた。子育ての現場だけでなく、支援をしている行政機関の取り組みについても学習を深めることができた。

（1）保育園での園児との活動を通して、発達にあわせた関わりについて学ぶ

子どもと関わるなかで、名前を知ってもらいながらコミュニケーションをとるきっかけ

けになるよう、名札作りをおこなった。保育園へ実習に伺う前に、子どもたちが親しみやすく子どもの認知度が高いキャラクターを調べ、名札作りをした。その名札を付けて、地域にある保育園で、園児との交流を通し子どもの発達を学ぶため、生徒自らが子どもの発達に合わせた遊び子を考え、実践した。



保育園では、異年齢保育について学び異年齢保育をすることで園児たちが学べることや特徴を知りたかった。保育園での見学をはじめ、発達にあわせた遊びを考え保育士の方々と内容の打ち合わせを行い、修正を重ねながら実践に臨んだ。実際に行ってみると、説明についての改善点や、同年齢でも発達段階には個人差があるため活動時間の配慮が必要なことなどを学ぶことができた。異年齢保育では年長の子どもが年少の子どもに教えたり、助け合ったりする姿や、年齢関係なく仲良くしている姿が見られ、年下の子に対して思いやりを持って接することができるようになったり、年齢関係なく誰とでも関わることができるようになるということがわかった。



(2) 養護学校の生活から、子どもの学習環境を学ぶ

養護学校の寄宿舎での支援や生活について学び、中学部での学習内容や学習環境、進学支援について学びたいと思い、上田養護学校様に依頼をし、見学をさせていただいた。

寄宿舎では生徒や職員が集まってテレビを見たり話をしたりして、話題を共有し合っていること、洗濯物を洗って干すことや、自室の布団の出し入れなど、生活に必要な動作は全て自分でいきなり自立支援がされていることがわかった。

中学部ではそれぞれの教室で個別の学習となり、一人ひとりに合わせた学習内容が組まれていることを知った。また、落ち着いて勉強に集中できる環境を作るためにパーテ

ーションを活用している生徒もいた。学校自体にはチャイムがなく、生徒が時計を見て自分で行動できるようにするためだということがわかった。

また、常に全教員が小さなバックを持ち歩いていることに気づき理由を尋ねると、中にはハサミは目に入るところにあると危ないため、置いておくのではなく常に持ち歩くようにしているハサミやシールなど生徒を指導するうえで必要なものが入っていることがわかった。

教員以外にも、多職種の専門職員が多くいると思っていましたが、医療関係者が数名いると知り、支援状況が気になった。さらに知りたいことが増えた。中学部の学習の様子を見ることで、その後の高等部での学習活動や高校受験についても気になった。



(3) 子育て支援やひとり親への支援について学ぶ

母子支援・父子支援に興味があり、子育て支援やひとり親への支援に興味があり、子育て支援センターに来る相談の事例や実際の支援体制について知りたいと思い、上田市役所の子育て支援を行っている担当者様に質問をしに行った。専門職の方にお話を聞き、相談する場所は支援センターだけではなく、保育所や市役所など様々な場所に作られていた。また、子育て支援センターは専門職への相談だけでなく、父親も関わりながら参加できるイベントがあり、そのイベントで保護者同士でも相談ができることを知った。

また、父親などの配偶者から虐待を受けている母子への支援として、遠方の母子寮を勧める取り組みがあることや虐待について親が自分から申し出ることもあると知った。法的な支援だけでなく、子育て支援センターはもちろん、親子で利用できる施設が身近にあることを見学することで学ぶことができた。相談できる場所は支援センターだけだと思っていたが、保育所や市役所など様々な場所で相談できることを知り、父親、母親を問わないことや、引っ越してきた人も相談しやすい環境が作られていると感じた。子育て世帯に、相談できる場所や支援に関する情報について知られていないことがあると感じ、情報の伝え方が課題ではないかと思った。

(4) 病児保育での支援内容を学ぶ

病気の子供に対してどのような支援をしているのかを学ぶため上田病院病児保育セ

ンターに行った。親と離れて過ごす子どもはとても不安に感じると思うため、子どもと接しながら泣いてる子には泣き止むまで抱っこを続けたり、「お母さんだったらどうするかな？」と考えて接していると教えてもらい、病気の子どもの心細い思いに寄り添っていることを学んだ。また、看護師が常駐していることや、上田病院の小児科が近くにあるため、具合が悪くなってしまった場合にはすぐに見てもらえるなどの支援方法があることもわかり、医療との連携の大切さを学べた。しかし、病児保育センターは上田市内でもまだ2か所しかなく、小規模での運営である。そのため現代日本の子育て世代は共働きが多いため、上田市内外でも病児保育センターが増えていくことで、保護者への支援にも繋がるのではないかと考えた。

しかし、昔と今の保育園の在り方に違いがでてきていて、保育士・看護師の方々も頻繁に研修を受けていかないと、さまざまな現代の課題に対応していくことの困難さがあることも教えていただいた。やりがいがある仕事ではあるが、大変なことも多々あることが分かった。

6 研究成果

4つのグループに分かれて活動することで、児童に関する制度や支援のあり方から、施設などの環境整備にわたり、児童や保護者を取り巻く状況について学ぶことができた。事前準備は大変なことも多かったが、活動に向けてしっかり準備することで実際に見学をしたり実践をするなかで、より深く知りたいことや疑問が出てくることがわかり生徒たちの学びたいと思う探求心に終わりはないように感じた。